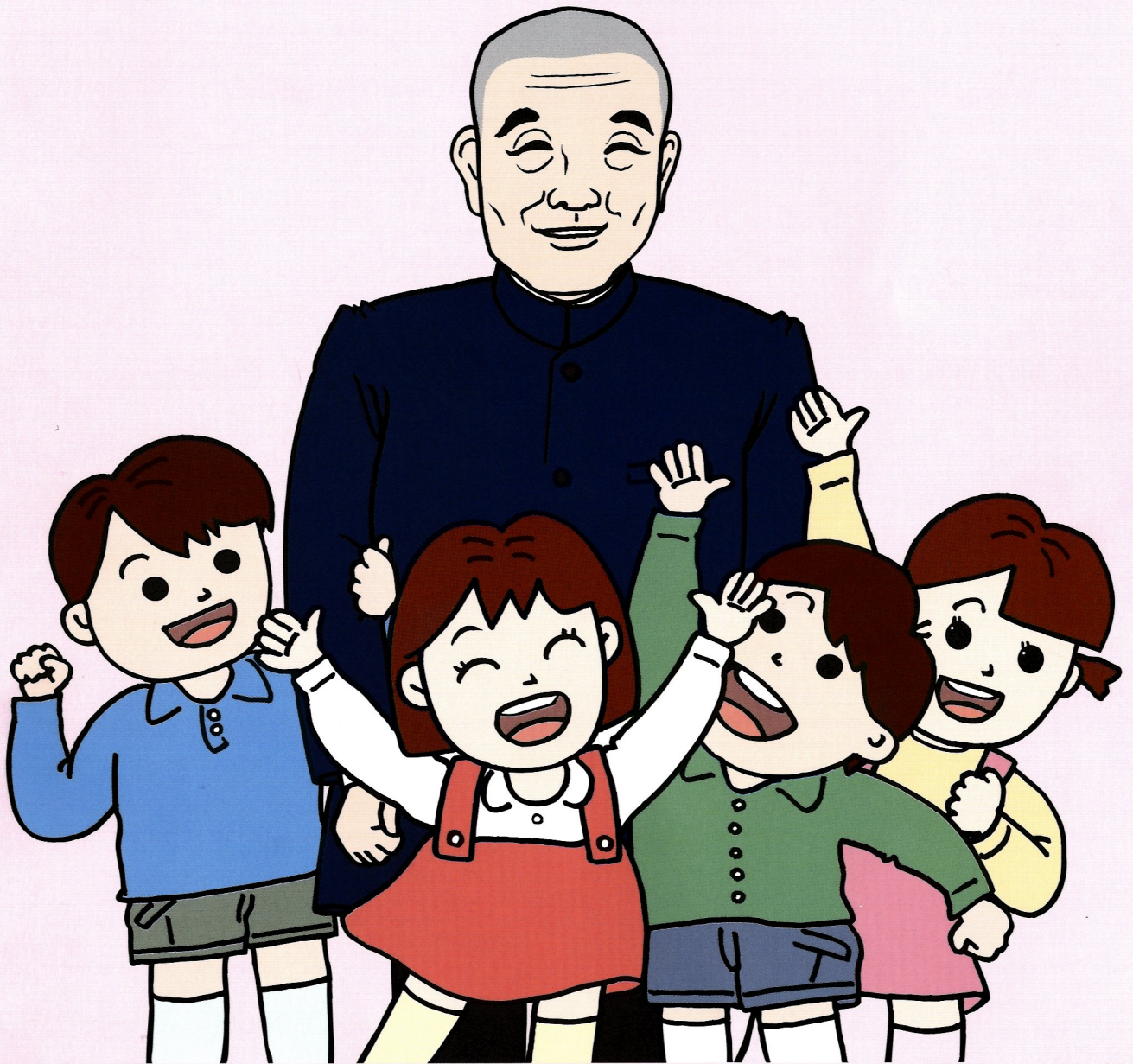


びょう  
ハンセン病と  
お がさ わら のぼる はか せ  
小笠原登博士



じ もく じ ちようじん けん きよう いく ちよう さ けん きゆう い いん かい  
甚目寺町人権教育調査研究委員会



## は じ め に

ハンセン病という言葉<sup>びょう ことば</sup>を聞いた<sup>き</sup>ことがありますか。人々<sup>ひとびと</sup>から大変<sup>たいへん</sup>おそれられた<sup>おそ</sup>病気<sup>びょう</sup>で患者<sup>かんじゃ</sup>は言葉<sup>ことば</sup>で言い表<sup>い</sup>すことのできない<sup>あ</sup>差別<sup>さべつ</sup>を受けました。

そして、そのハンセン病<sup>びょう</sup>に大変<sup>たいへん</sup>深く<sup>ふか</sup>かかわった、甚目寺町<sup>じもくじちやう</sup>出身<sup>しゅっしん</sup>の医学<sup>いがく</sup>博士<sup>はかせ</sup>がいました。平成<sup>へいせい</sup>19年<sup>ねん</sup>8月<sup>がつ</sup>、甚目寺町<sup>じもくじちやう</sup>政施行<sup>せいせこう</sup>75周年<sup>しゅうねん</sup>を記念<sup>きねん</sup>して名誉<sup>めいよ</sup>町民<sup>ちやうみん</sup>第2号<sup>だいごう</sup>に選ば<sup>えら</sup>れた小笠原<sup>おがさわら</sup>登<sup>のぼ</sup>り博士<sup>はかせ</sup>です。博士<sup>はかせ</sup>は、その頃<sup>ころ</sup>不治<sup>ふち</sup>の病<sup>やまい</sup>と恐れられた<sup>おそ</sup>ハンセン病<sup>びょう</sup>は「感染<sup>かんせん</sup>力は弱<sup>じやく</sup>く隔離<sup>かくり</sup>の必要<sup>ひつよう</sup>はない」と主張<sup>しゆちやう</sup>され、当時<sup>とうじ</sup>の国家<sup>こっか</sup>による強制<sup>きやうせい</sup>隔離<sup>かくり</sup>に強<sup>つよ</sup>く反対<sup>はんたい</sup>され、ハンセン病<sup>びょう</sup>患者<sup>かんじゃ</sup>に大きな<sup>おお</sup>希望<sup>きぼう</sup>を与<sup>あた</sup>えました。

この郷土<sup>きやうど</sup>の偉人<sup>いじん</sup>と、ハンセン病<sup>びょう</sup>を取巻<sup>とりま</sup>く様々<sup>さまざま</sup>な問題<sup>もんだい</sup>を小学生<sup>しょうがくせい</sup>の女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>「ノノンちゃん」とその「お母<sup>おほ</sup>さん」の二人<sup>ふたり</sup>の目<sup>め</sup>を通<sup>とお</sup>して考<sup>かんが</sup>えていきたいと思<sup>おも</sup>います。「ノノンちゃん」は何<sup>なん</sup>にでも関<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>があり、今回<sup>こんかい</sup>はハンセン病<sup>びょう</sup>についてお母<sup>おほ</sup>さんを質<sup>しつもん</sup>問<sup>もん</sup>攻<sup>げ</sup>めにしますが、お母<sup>おほ</sup>さんは小学<sup>しょうがく</sup>校<sup>こう</sup>の先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>をしていま<sup>して</sup>いますのでど<sup>ど</sup>んな質<sup>しつもん</sup>問<sup>もん</sup>にも答<sup>こた</sup>えてくれます。

それではノノンちゃん<sup>いっしょ</sup>と一緒に<sup>いっしょ</sup>にハンセン病<sup>びょう</sup>と小笠原<sup>おがさわら</sup>博士<sup>はかせ</sup>について勉<sup>べん</sup>強<sup>きやう</sup>しましょう。



えんしゅう じ  
円周寺



おがさわらのぼる はかせ  
小笠原登 博士

もくじ

はじめに

もくじ

ハンセン病ってどんな病気？	1
なぜハンセン病と呼ばれるの？	2
感染と発病	4
ハンセン病の歴史	5
強制隔離	7
療養所での生活	9
病気の苦しみともう一つの苦しみ	10
ハンセン病の治療	11
ハンセン病の今	12
小笠原登博士の伝記「ライを病む人に捧げた40年」	
(1) 啓導じいさま大よろこび	14
(2) 登博士の子ども時代	15
(3) 登博士の学生時代	18
(4) 人類のために—ライ医学の研究—	20
(5) ライを病む人とともに	23
(6) 博士の死	26
啓導じいさまの影響	28
宗教の影響	29
らいは不治でない～ハンセン病論争～	30
撞木と鐘と鐘の音	32
空欄のカルテ	33
国って何だろ？	35

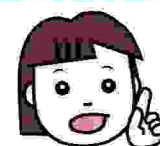
おわりに



ノノンちゃん

お母さん

● ハンセン病ってどんな病気？



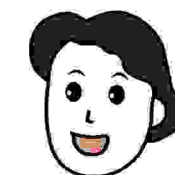
お母さん、ハンセン病ってどんな病気なの？

ずーっと前は「らい病」と呼ばれ、顔の形や、手足が変形したりして、見ただけで病気とわかるので皆からとてもおそれられた病気なの。この病気にかかったら一生治らないと思われていたのよ。



こわい病気ね！変形ってどういうこと？

手や足の指が曲がったり、口や目がしっかり閉じなかったりしたの。顔や手は服でかくれないでしょ、ひと目ですぐわかるほどの病気の跡が残ることもあったの。また、ハンセン病になると皮膚や痛みを感じるところがこわれてしまうので、手や足をけがしても痛くないのよ。







私、痛いのはいやだけど。

ノンは痛がりだからね。でも、痛みがあるからけがしたことがわかるし、早く治そうと思うよね。ハンセン病の人は痛みを脳に伝える神経が働かないから痛くないわけで、けがや火傷をしたことがわからないこともあるの。



そうか体を守るには痛みも必要ね。

足のうらをけがしても痛みが無いから気づかずにいたら、ばい菌が入ってひどくなったり、寝ているときにねずみにかじられても気づかなかったこともあったみたい。



そうかハンセン病になると自分の体が守れなくなるのね。

## なぜハンセン病と呼ばれるの？



なぜ、ハンセン病にかかるの？

江戸時代までは原因がよくわからなかったの、ただ、発病する人が比較的限られていたので遺伝病と間違われていたようね。



遺伝病って？

遺伝というのは、簡単に言えば親から子に伝わることね。お父さんやお母さんに似ているところがあるでしょ。髪の毛が黒いとか、茶色いとか、ちぢれているとかたくさんあるわね。ハンセン病は遺伝する病気で他人にはうつらないと考えられていたのよ。だから、患者を隔離する考えは無かったし、困っている患者の食事をお世話したこともあったみたい。患者にさわってもうつらないと思っていたのね。ところが、1873年(明治6年)ノルウェーのハンセンという人によって「らい菌」が発見されたの。



「らい菌」てどんな菌？

ハンセン病を引き起こす菌なの。親から子に遺伝する病気と思われていたハンセン病が、うつる感染症だって事が「らい菌」の発見でわかったのね。発見したお医者さんの名前から現在ではハンセン病と呼ぶようになったのよ。

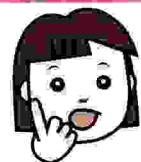


らい菌

それまで使っていた「らい」とか「らい病」という呼び方はこの病気の長い歴史の中で偏見や差別を生み出していたので呼び方をハンセン病に改めたのね。



## 感染と発病



「らい菌」が体に入るとみんなハンセン病になっちゃうんだ！

ところがそうじゃないの。病気を引き起こす「らい菌」が体に入って生き続けることを感染と言うの。でも、「らい菌」が体の中に入っても健康な人もいて、だれもがすぐに病気になるわけじゃないのよ。



病気の菌が体に入っても病気じゃないって変な話！

「らい菌」は毒性がとても弱くて、菌が体の中に入ってもそれだけでは悪さをしないの。もともと人間の体には悪い菌が入ってきたらやっつける機能もあるし。病気の様々な症状が体に表れることを発病と言うけど、そういう人はそんなに多くなかったのね。感染してから発病するまでの期間が3年から10年以上と長く、発病しても自然に治る人もいたの。これは小笠原博士の「鐘木と鐘と鐘の音」の話にも出てくるけれど、「らい菌」に感染した人が「ハンセン病」に発病しやすい体質を持っていることがとても重要なもの。



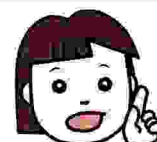
らい菌が体に入れば誰でもすぐ病気になると思ったけれどそうじゃないんだ！



小笠原博士は早くから発病しやすい体質に注目していたのね。素晴らしい先見性、つまり物事の本質を見極め先を見通す力が備わった人だったのね。

また、「らい菌」はとても感染力が弱く、成人の場合は、ほとんど感染することはないのよ。その証拠にハンセン病療養所で働いている人でハンセン病になった人は一人もいないの。だから、見た目には後遺症があってもハンセン病の治った人から感染する可能性はまったくないわけね。

## ハンセン病の歴史



ハンセン病の患者さんはどんな生活をしてたのかな？

江戸時代や明治時代には神社やお寺で物乞いをする人がいたみたい。ノノンの知っている甚目寺観音にも行き場の無い患者さんがいたのよ。遺伝病という迷信が定着し、人にはうつらないと思われていたから隔離されることはなかったのね。



明治になって日本に入ってきた外国人宣教師が、神社やお寺で物乞いをしているハンセン病の患者を救済するための施設を作り、また、明治政府に対しては、患者がまったく治療されずに放置されていることを非難したの。

それで明治政府は近代国家としての体面を保つために、明治40年放浪している患者を収容して隔離することにしたの。そのために「らい予防法」という法律をつくったのよ。





その「らい予防法」によって患者さんは救われたわけね。

ところがそうじゃないのよ。確かに「らい予防法」に基づいて療養所が建設されたけど、それは治療が目的というより、放浪している患者が人々の目にふれないようにするのが目的だったの。放浪している患者の収容は強制的に行われ、患者がさわった物は徹底的に消毒されたので、従来の遺伝病という迷信のほかに怖い伝染病という誤った情報が加わって、日本にハンセン病に対する偏見と差別が定着してしまったの。



ハンセン病患者に対する差別が前よりひどくなったってこと？

そう！ 遺伝病で人にはうつらないと思っていたから、食べ物あげたりする人もいたけれど、うつるとわかったら、誰も怖くて近づかないでしょ。



## 強制隔離

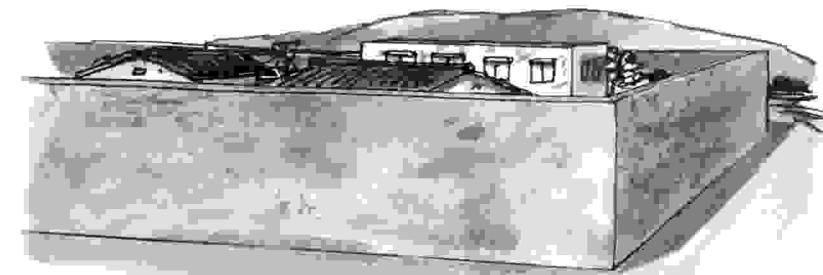


ハンセン病の問題を考えると絶対避けてはいけない問題のひとつに強制隔離があり、何が間違っていたのか考える必要があると思うの。

これから同じ間違いを起こさないために！ でしょ？



偉い！ 国は最初、神社やお寺で物乞いをしていた貧乏な患者だけを療養所に入れていたの。他の患者は人目を避けながらひっそり暮らしていたけれど、昭和6年から国は全ての患者を強制隔離して社会から患者をなくそうと考え、それを県ごとに競争させたの。もちろん愛知県もこの競争に積極的にかかわってしまったわけ。あそこの家にハンセン病の患者がいるとわかれば、本人はもちろん家族も地域からひどい差別を受け、患者は家にいることができなくなり、仕方なく療養所に入ったの。療養所ではお金が取り上げられ、その代わりに療養所だけでしか通用しない金券を渡されたの。入所者の逃亡を防ぐためね。







逃亡を防ぐって？別に罪人じゃないのに！

療養所とは名ばかりで患者の治療より隔離そのものに重点が置かれて、療養所の周りは高いへいで囲まれたり、山奥にあたり、離れ孤島にあたりして簡単に出ることはできなくされたの。病気が治っても社会に戻れる人はほとんどいなくて、ここで一生を終えさせられたの。だから療養所には故郷へ帰る事のできなかつた人たちのお墓があるのよ。



死んでもお家に帰れないなんて悲しすぎる。国はこんなひどい事をなぜしたの？

ハンセン病の患者に対しては、人間が子どもを持つという当たり前の権利や、これから生まれてくる健康な赤ちゃんの命まで奪うようなひどいこともしたの。この当時の国は弱い者の味方ではなかつたといえるわね。



この当時っていつごろ？

「らい予防法」が改正され全患者の強制隔離を定めたのが昭和6年、同じ年に満州事変が起こっているのよ。日本は戦争へ突き進もうとしていた時で、ハンセン病の患者のような弱い立場の人について真剣に考えてなかつたのかな。国にとって役に立たないものを排除しようという考えがあつたと思うの。



## 療養所での生活



今でも日本には15のハンセン病療養所があり、約2800人の入所者が生活しているの。しかし、ハンセン病患者はほとんどいないのよ。

療養所って病気を治すところでしょ？治ればお家に帰れるんじゃないの？



ハンセン病の悲しいところはそこにあるの。療養所に入ると昔は新しい名前をつけられて、本当の名前を名乗ると名前から故郷や家族のことがわかるでしょ！だから別々の名前を名乗つたの。多くの人たちはハンセン病は治らない病気だと思つていたので、いったん病気となつた人が、自分たちの近くにいるとうつると思つて差別したわけね。つまり、今療養所にいる人は病気が治つても、うちへ帰れなかつた人ばかりなの。



療養所での生活の様子は？

今はとても良くなつたといえるけれど、以前は療養所とは名ばかりで、まるで強制収容所と言つてもいいほどひどいものだったの。狭い部屋に何人も一緒に押し込められ、治療どころか、軽度の患者が他の患者の世話をするようなことが毎日のように行われていたの。患者が反抗的な態度をとると、療養所の所長の権限でその患者を監房と言う狭くて暗くて冷たい部屋に何日も閉じ込めたの。







その人は何か悪いことしたの？

例えば、親の重病の知らせを聞いて療養所から外出したり、燃料用に木を切ったりしただけなのよ。



療養所ってひどいところだったのね。

患者さんの苦勞は想像できないほどだったと思うわ。



## ● 病気の苦しみともう一つの苦しみ



病気になれば誰でも病気の苦しみがあるけど、ハンセン病はたとえ完全に治っても顔や手足の変形が後遺症として残り、誰にでもハンセン病とわかるため人々から差別を受けたの。例えば、ノノンがインフルエンザにかかった時、友達にうつすといけなから外へ出ちゃダメって言われたけど、それが治れば元のように一緒に遊べるでしょ。

ウン。治るまでおとなしく家にいた！



後遺症と言うのは、病気が治っても体に病気や怪我の跡が残ることよ。ハンセン病で言えば「らい菌」が死滅するか、感染性を失って病気が治っても、病気のために曲がった手足の指は元にもどらないの。ちょっと見ただけで体の変形がわかる後遺症があれば、患者さんが「私から感染はしません。」と言っても近づく人はいないわ。

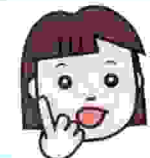
また、遺伝で病気になるとの迷信から、ハンセン病患者を出した家族も差別されるので、ハンセン病患者と家族の縁を切った人がほとんどだったの。

ハンセン病は病気が治っても、病気とはまったく関係ない家族も、人々から差別され、患者と家族の絆も引き裂いてしまったの。

そうか。もう一つの苦しみのもと、人の心の中にあるんだ。悲しすぎる。



## ● ハンセン病の治療



そんなに人からおそれられたハンセン病をどうやって治療したの？

ある植物の実から絞った油を注射するのが唯一の方法だったんだけど、これが涙が出るほど痛い割にあまり効果がないこともあったのね。戦争中の昭和18年にアメリカでプロミンと言う名前の特効薬が作られ、昭和22年頃から本格的な治療が始まり、その後別の薬もできてハンセン病は簡単に治るようになったのよ。







よかった！

今では、早期発見と早期治療により、障害などの後遺症を残さず、短期間で完治する病気なの。一方、不幸にして発見が遅れ、障害を残した場合でも、医学の進歩により、その障害は最小限に食い止めることができるようになったの。外見でハンセン病とわかることはなく、昔人々がおそれたように一生治らない病気ではなくなったのよ。



ということは、ハンセン病の人はどうしてるの？

正確に言うと、らい菌が体の中に入らないからハンセン病患者ではないわね。ハンセン病が治った元患者ね。ほとんどの人が療養所で暮らして、後遺症の治療などを受けているそうよ。



## ハンセン病の今



あたらしい患者さんはいるのかな？

日本ではここ数年、1年間の発生数は10人以下だそうよ。今後、日本で患者さんが増加することはないけど、世界ではまだ、多くの患者さんが新たに発生しているの。衛生状態が悪かったり、貧しい国に多いそうよ。



その人たちは強制隔離されちゃうの？

大丈夫よ！こわい病気ではないことが、今でははっきりしてるからね。

強制隔離をしていた「らい予防法」は平成8年に廃止され、もうだれも強制隔離されることはないわ。この廃止を先頭に立って推進したのは、小笠原登博士の戦争中の弟子であった大谷藤郎博士なの。大谷博士のお母さんも甚目寺町出身なのよ。そして5年後の平成13年、熊本地方裁判所で国の強制隔離は間違いだったとの判決があり、総理大臣がハンセン病患者に対して、国がハンセン病患者にしてきたことは間違っていましたと初めて謝罪したの。



よかった！これでハンセン病患者さんたちも安心ね。

ところがそんなに簡単じゃないのよね。今までの長い間の差別や偏見は簡単にはなくなるらない。まだまだハンセン病は感染力が強くて、一生治らない病気と思っている人も少なくないのよ。その人たちには早く正しい知識をつけてほしいものね。



今までハンセン病について、何もわからなかったけれど、お母さんの話でよくわかったわ。私も正しいことをみんなに伝えよう。



# 「ライを病む人に捧げた40年」

● 甚目寺むかしばなし 第11話から ●

## (1) 啓導じいさま大よろこび

「うむ、男の子だな、あの元気な声は。」

うぶ声を聞いた円周寺のおじさん、啓導さんはにこにこ顔です。上  
山 おんな こ つぎ おとこ こ にん まご けいどう りおとこ  
2人が女の子、その次が男の子、3人の孫をもつ啓導さんはもう1人男  
まご  
の孫がほしくてたまらなかったのです。

「おじいさま、おぼっちゃまですよ。」

と聞かされた啓導さんはとうとう両手を高くあげてばんざいでもする

ようなかっこうで、

「よかった、よかった。上  
おとこ こ ぼう  
の男の子はお坊さんにしてこ  
てら あと う  
の寺の後つぎにしよう。生ま  
れたばかりのこの孫は医者  
のあと  
の後つぎにしよう。」

とってよろこびました。

啓導さんは「ご院主さま」

とよばれる円周寺のお坊さまでもあるし、「甚目寺の医者どの」とよ  
ばれるお医者さんでもあったので、2人の孫をそれぞれ自分の後つぎ  
にしたかったのでしょう。医者といっても啓導さんは昔中国から伝  
わった漢方医として尾張の殿さまからもみとめられた医者であるばか  
りでなく、50年ほど前に、オランダのシーボルトという有名な医者か  
ら伝えられた蘭方医の研究もしている珍しい評判の高い人でした。



シーボルトの弟子でよく勉強していた医学の大家、浅井玄庵をこっそ  
り円周寺にかくまって研究をすすめた啓導さんです。

啓導じいさまをこんなによろこばせて明治21年7月10日に生まれた  
この男の子こそ、このお話の主人公「小笠原 登」博士です。

## (2) 登博士の子ども時代

「登」とかいたこの名前は「のぼる」というのがほんとうですがこの  
文字を「と」とも読むので近所の人、のちの学校友達、そして家の人  
たちからは「とうさま」とか「とうさ」ともよばれながら大きくなりま  
した。

登が4才になった頃、漢文のおけいこを始めました。中国に昔から  
つた  
伝わる「四書五経」とよばれる漢字ばかりで書かれた本を、先生が文字  
をしめ  
を示しながら読むのを見ていて  
こえ だ おほ  
声を出してそら覚えに読んでゆ  
くもので、このおけいこのしか  
たは素読といわれます。漢文の  
おけいこは10才をこえるまで  
つづき、むずかしい四書五経を  
ほとんど覚えてしまいました。  
かわいい声をはりあげて素読を  
する登の声をきいた近所の人  
はびっくりしたといひます。

「……し、いわく、ちしゃは水をたのしみ、じんしゃは山をたのしむ。  
……ちしゃはうごき、じんしゃはしずかなり……ちしゃはたのしみ、





……じんしゃはいのちながし……。」

子曰知者楽水 仁者乐山 知者動仁者静 知者楽仁者寿

「とうさまは、なんたらかしこい子だろう。」

と舌をまいておどろきました。

漢文の先生は下条半五郎先生といい、明治になる前は武士（尾張藩中流階級武士）であった人ですが明治になって尾張藩がつぶれてからは武士をやめ近所の子供に「よみ、かき、そろばん」を教えていて、明治5年小学校ができてからは小学校の先生もつとめた人です。漢文については特にすぐれた先生で、後に登少年がりっぱな学者（京都大学の先生）となつてからの学生への話や、書きあらわした本の中にも漢文の話をかきそえるなど、幼い頃下条先生から受けた力がなみなみでなかったことがよくわかります。今でも円周寺には70才をこえてからの登博士の日記が大切にしまつてあります。そのところどころに漢詩が書いてあります。下条先生の登少年へのおけいこはきびしいものでした。「この子は大きくなってきっと世の中のためにはたらく人になる」と思い、そのためにきつく注意したのでしょう。

お寺の子であった登は、5才のころからお経のけいこに通いました。

4才年上の兄さんと一緒に

に3キロメートルもはなれている大治村（今の大治町）の東条にある本覚寺のお坊さんに正しいお経の読み方を教えていただくためです。寒い冬の道を5才の子がてくてく歩いて行くのですから大



変です。

「本覚寺のおっさまはお経の正しい読み方では有名なお方です。2人ともよーくおぼえてくるんだよ。」

お経の本をきちんとふろしきに包み、手に持たせながらお母さんはそういいました。

帰ってくると

「今日おぼえたところを本堂の佛さまの前でお読みしようね。」

そういつてじっとすわつて2人のお経をよむ声をききながら、おまいりをしてくれるお母さんでした。

明治28年4月、登は甚目寺尋常小学校に入学しました。あまり勉強はしなくても、よい成績でした。

「登さまにはかなわん。」

と、友だちが感心したばかりでなく、おこないもすぐれていたことがその頃の学校の記録にも残っています。読み方（今の国語）書き方（今の毛筆習字）歴史地理（今の社会科理科）などずばぬけていたということです。

おとなしい子でしたが泣き虫ではなく、きかん気のところがあつて友達とは時々けんかもしています。

はさみしょうぎや碁をうつことをおぼえて遊びましたが五目ならべもすきでした。うっかりして自分が負けると大そう残念がりました。碁の腕まえはぐんぐんあがり、大人の人を相手にし、それでいて負けないようになりました。勝つたと思つていた碁が最後になつて負けたくやしさに碁盤をけとばし、碁盤の角が柱にあたり、円周寺には今も柱にそのきずあとが残っています。



### (3) 登博士の学生時代

中学校・高等学校・大学はすべて京都で勉強をしました。明治から大正の始めごろのことで、そのような上級学校へ進む人はごく少ない時でした。高等学校・大学というのは当時の第三高等学校・京都帝国大学という日本でも1・2といわれるりっぱな学校でした。入学するのも入学してからの勉強も大へんでした。

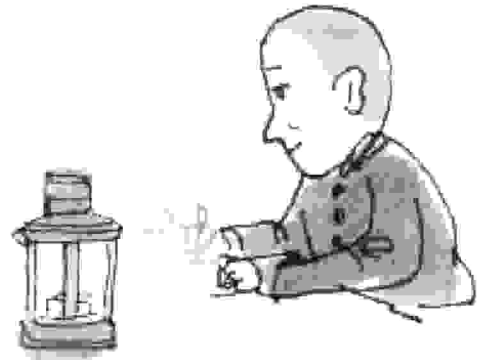
登の兄さんも同じように京都で勉強し、兄弟で1軒の家をかりて一緒にくらししました。

小さい時のお母さんのしつけを守り、また自分も佛様を信仰する心が強く、朝晩兄弟とも必ずおまいりをし、お経を読みました。

それぞれのへやには本がぎっしりならば、毎晩勉強につとめ、たまに郷里の甚目寺村へ帰り円周寺でくらすことがあっても、夜おそくまで本を読むことが多く、お母さんは無理がすぎて病気になってはと心配していました。当時の甚目寺村にはまだ電燈がなく、カンテラという石油ランプをともしての勉強だったこともあり、お母さんの心配していたことがほんとうになってしまいました。

第三高等学校の学生の時、午後になると少し熱が出て、疲れがひどく体が目立ってやせてきました。恐ろしい「肺結核」という病気にかかったのです。肺結核が重くなれば熱がつづき、咳が出て体がやせ衰え、血をはいたりして必ず死ぬといわれていた頃です。

肺結核ときいて一度はすっかり力をおとしがっかりした登ですが、



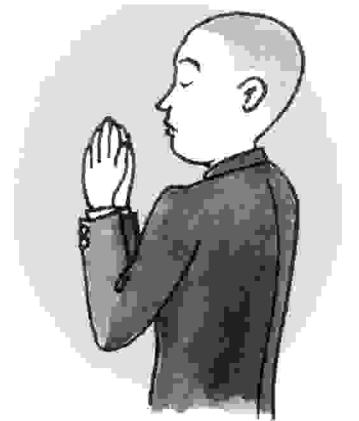
さすが「甚目寺の医者どの」とよばれた啓導じいさまの孫です。「この病気に負けないようにがんばろう」と覚悟をきめ、静かに体を休め、朝から夜まできまり正しい生活に入りました。心に不安がある時は静かに佛教の本を読みました。好きな漢文ばかりでなく、文学の本も読み、時には時間をきめて習字や墨絵のけいこもしました。もちろん、お母さんや姉さんのやさしい看病もつづきました。

肺結核とは3年間たたかいつづき、負けなかった登は、まるで奇蹟のように元気をとりもどし、高等学校の生活にもどることができました。

- 心の不安を消してくれた佛教のありがたさ
- 文学から学んだいろいろな人々の広い考え方
- 漢詩や歌・墨絵に自分の気持ちをあらわしてみる
- お母さんを始め家族の人々のあたたかい心
- とりもどした健康のよろこび……

3年間の病気を通し、登の心のうちにはもえあがるような人間として生きるよろこびがわきあがってきました。お母さんの強いすすめもあって前にものべた京都帝国大学(今の京都大学)の医学部へ進む覚悟をきめました。

- からだの弱い人々のために
  - 心の不安に負けそうな人のために
  - 佛教の教えは私が忘れていても佛さまは私を忘れてくださらない
- ……



#### (4) 人類のために——ライ医学の研究——



こうして大正4年京都帝国大学医学部を卒業した登はそのま大学の研究室にのこり、医学の研究をつづけました。

心の中には佛教への深い信仰を持ち、長い間病気で休んだ自分の苦しい体験もあり、「世の中で一番不幸な

人々をすくうための医学を研究しよう」と心にちかいました。

10年近くもつづけた研究がみのり医学博士となりました。そして京都帝国大学の先生となり「学問の研究」「学生の指導」「大学病院での病人の診療」という大切な仕事をつづけました。登博士の研究室には夜おそくまで電燈がともりその熱心さはおどろくばかりです。

博士となり、大学の先生となっても、身なりなど少しもかまいません。学生時代の洋服の金ボタンを黒いボタンに取りかえただけ、頭は学生時代から丸刈りです。白衣をぬいで病院から研究室へと帰ろうとすると

「えっ、あの方が京都大学の先生ですか 有名な小笠原先生ですか。」  
といったはじめて博士をみる人々はおどろいたということです。

小笠原博士の研究室は皮膚科特別研究室(ライ研究所)とよばれ、主としてライ病の研究をしました。ライ病(現在はハンセン病といいます)は古くからある人類・世界での最もむずかしい病気のひとつで、西暦1874年ノルウェーのアルマウエル・ハンセン博士によって発見さ

れた「ライ菌」によっておこる伝染病であり、神経と皮膚がおかされる慢性の病気です。病気が重くなると、皮膚の色がかわり、痛みやつめたさもわからなくなり、首や腕の神経がはれてきます。もっと重くなると、皮膚がくずれて、頭の髪の毛がぬけたり、顔がゆがんできます。昔はなおらない病気とされ、その上顔かたちがみにくくゆがんだりするので人々からきられて「あの人はライ病だ」といわれると村の人々はもちろん、家族からさえもきられて泣く泣く家や村を追い出され、乞食となってほかの村や町をさまよい歩き、行くえもわからず死ぬような人もありました。

国立の療養所ができてからは、ライ病患者とされた人はほとんど強制的にきめられた療養所に送られました。そして死ぬまでそこで療養生活をつづけました。療養所の多くは人里から離れた所や離れ島にあり、ここに入れられた患者たちは遠いふるさとのことや、その後の苦しいさすらいの旅のことを夢に見ながら自分の運命をなげき悲しんでくらししたこととされます。

療養所で亡くなくても遺骨をひきとりに来る家族は少なく、隣りの三重県から岡山県のある国立療養所に送られて療養中に亡くなった人のうち、家族のないとき

れた人々が178人もあり、三重県庁が主催して、「無縁佛」として慰霊の法要をしたことがこの頃の新聞記事でわかりました。

小笠原博士を中心とする京都大学の研究室ではこれらの不幸な人々のために研





きゆう ふか  
究を深めました。

(ライ病はどのようにして発病するのか、ライ菌はどのようにして人体でひろまるのか、ライ菌の感染力はどうなのか) ………

けんきゅうしつ けんきゅう すず い きん じんたい はい  
研究室ではだんだん研究を進めて行って、ライ菌が人体に入っても病気になる、つまり伝染しない場合があることをつきとめました。いつたい とき きん ま びょうき  
一体、どういう時に、ライ菌に負けて病気になるんだろう。

このようなことを研究しているうちに、ライ菌を自分のからだの中に注射して、研究を進めた人がいました。もし発病してあのみにくいライ病にでもなったらとびっくりするようなお話ですが、小笠原博士を始め研究室の人々が「世界人類の中の一不幸な人をすくうために！」という熱意にもえていたことはこのお話でもよくわかります。

おがさわらはかせ むね なか びょう いし  
小笠原博士の胸の中には、ライ病かもしれないときられて、医師にさえも診てもらえなかった遠くから来た患者の診察にあたった時、かんしゃ なみだ なが  
患者がぼろぼろと涙を流して

「先生にさわってもらった。もう死んでも思い残すことはない。」

と、よろこんでくれた感動がいきいきと燃えあがっていたにちがいません。



## (5) ライを病む人とともに

きょうと だいがく けんきゅうじょ びょういん はかせ けんきゅう けつこ ごと  
京都大学のライ研究所の病院へは、博士の研究の結果や、その後よい薬ができたことも聞きつけて、大勢の人々が来ました。ライ病ではないかと心配な人、軽いけれどもライ病のようだという人、少し重くなって頭や顔を包むようにしてくる人………京都大学の病院で診療をうけカルテの残っている人だけでも1,500人もいます。遠くの診療所へ送られることを恐れて来た人もあります。大勢の人を治療し、よくなれば世の中へ出て、もう一度元気になってはたらくよう励ましました。

しょうわ 23 ねん きょうと だいがく を やめて、その後国立病院の医長をしたり、最後には昭和32年から41年まで国立ライ療養所の医官としてつとめました。これを合わせると、不幸なライを病む人々のために40年間もつくしたことになります。

おがさわらはかせ さいご  
小笠原博士が最後につとめたのは「国立療養所奄美和光園」といって、九州の南、奄美群島の中の1番大きい島(奄美大島)の中心都市名瀬市の市街地から東に約8キロメートルはなれたところにありました。

あまみ ぐんとう たいへいようせんそう にほん あと  
奄美群島は太平洋戦争で日本がアメリカにまけた後、アメリカに占領されていたところであり、日本に復帰した昭和28年以降も島の人々は苦しい生活とたたかってきました。

わこうえん こま くる かんじゃ にん  
和光園も困ること、苦しいことばかりでした。患者が300人をこえているのに、医師はただ1人、園長さんがいるだけという大きなやみがありました。

はかせ こくりつびょういん いちよう じもくじ じたく しず けんきゅうせいかつ  
博士が国立病院の医長をやめて甚目寺の自宅で静かに研究生活をつづけてしていることを聞いた園長さんは、

「先生、ぜひ和光園に来てください。大勢の患者がまっています。…先生に来ていただけたらほんとうにありがたいことですよ。」と、お願いをしました。

お願いをきいて、博士が和光園についたのは昭和32年の9月でした。京都大学の先生をしていた小笠原博士が和光園に医師として来るということが患者の耳に入ると、おどろいたりよろこんだり大騒ぎでしたが中には

「大学の先生といったら、きっときついおっかない顔だろうし、どなるかもしれんぞ」と不安に思う人もありました。



実際小笠原博士が和光園に着くと、職員の人たちまでびっくりしました。黒い詰襟の洋服を着、にこにこした顔で静かにあいさつをしながら病院に入りました。患者たちも不安どころか、すっかり安心しました。小笠原博士が和光園でどんな生活をしたかということは、職員や

患者の人々にも語つがれていますが、博士が書きのこし、今日円周寺に大切に保存されている、何冊かの大学ノートにしるされた「日記」によってもよくわかります。朝起きた時間、食事の内容、佛前での読経、その日の研究活動、治療のようすなどくわしく書いてあります。

和光園の医師の数もふえ、全部で5名になりましたがもちろん、小笠原博士が1番高齢です。昭和41年(1966)つかれが目立つようになり和光園を去り郷里の甚目寺へ帰ったのが78才ですから、和光園での活動は大部分が70才をこえてからです。

70才をこえてからも研究には熱心で博士の研究室には毎晩のように夜おそくまで電燈がついていたということです。

ライ専門の学者や医師の方々でつくられている「日本ライ学会」で最後の研究発表をされたのは昭和

39年で何と博士の76才の時です。このように学問の研究の結果をまとめた発表をこれまでずっとつづけてきましたが、その中の大切な部分を1冊の本にまとめて出版したのも和光園時代です。『漢方医学におけるライの研究』という本です。その後も研究を続け、甚目寺へ帰ってからまとめ出版したのが「漢方医学の再認識」という本です。くわしい事はよくわかりませんが、ライ病についての専門的な研究のほか、関係した栄養や食事のこともあり、現代の医学から見ても貴重な書物だということです。

和光園では患者の1人1人ににこにこあたたかくほほえみかけて診療し、元気づけてはげました。動けない患者のために毎日病室をみて廻り、時には軽いじょうだんをいってなぐさめたり、はげましたりしました。食事や運動の注意をこまかくお話をしたことが日記にかいてあります。日記といえば、ある日1人の患者が急に他の病気で苦しみ出した時のことが書いてあります。博士はつきっきりで治療看護にあたりましたがとうとう亡くなりました。別の部屋に移された、この亡くなった人の「霊前に唯一人通夜をし、静かに読経す……夜、他の患者来り」私の姿をみ「安心して帰る」とも書いてあります。





博士が和光園をやめた後、10年もたって尚病室には博士の写真を  
かざって、よろこびと感謝の気持ちをあらわす人々がいたというわけ  
もよくわかります。

そのほか日曜日にはお坊さんとして、佛教のお話をやさしく説いた  
り、また和光園付属の保育園の子供をかわいがって、町へ出る度にお  
菓子などのお土産を求めて来て子供のよろこぶ顔をみるのを楽しみと  
したお話もあります。がくわしい事ははぶきます。

## (6) 博士の死

小笠原博士が40年という長い間のライ患者への診療生活をやめて、  
甚目寺町へ帰ったのは前にも述べたように昭和41年(1966)の10月  
のことです。

78才という年には勝てません。つかれが目立つようになり、廊下を  
歩く時少し前かがみの博士の姿に前ほどの元気がありません。

年に1、2度郷里へ帰っていた博士はその年郷里へ帰ったきり、も  
うその姿を和光園でみることはできなくなりました。郷里の甚目寺  
町 円周寺へ帰った博士は血圧の高かったこともあり、医師の手当て  
を受けましたが、研究は続けました。

甚目寺へ帰ってから79才の時、和光園以来の研究をまとめて2冊目  
の著書を出版し、この貴重な書物を、希望の人には無料であげました。  
この事は当時の新聞にも大きくとりあげられ、老博士の努力をたたえ  
ました。

「ライの研究はもう終わった、これからはガンが人類の敵だ……。」

そうやって外国の書物まで取りよせてガンの研究にとりかかる博士  
でした。

80才をこえて研究と散歩を楽しむ博士にも悲しい最後がきました。  
昭和45年(1970)の冬の事です。疲れがひどく散歩もやめるように  
なった12月11日の朝

「ゆうべはほんとうにありがたい夢をみたよ。大勢の佛さまたちが私  
を迎えに来られたよ……紫の雲がひろがるその中から……。」

おちついた話しぶりでした。その夕方急に熱が高くなり、医者であ  
る博士自身が手当てをさしずして、医師の手当てを受けました。

12日。急報で飛ぶように京都大学から来られたお弟子の方々のつ  
くのも待たず、午前10時ごろ、静かに息をひきとりました。静かな臨  
終で、前の晩の夢の通り、よろこんで佛さまのお迎えを受けたからで  
しょう。

不幸なライを病む人々に捧げた40年。小笠原博士は永遠の眠りにつ  
きました。



※この「小笠原博士の伝記」は、1998年甚目寺町教育委員会発行「甚目寺むかしばなし」に掲載したものを改訂・転載したものです。



## 啓導じいさまの影響



小笠原博士の伝記「らいを病む人に捧げた40年」を読むと、博士がどんな人だったかとてもよくわかるわ。博士の一生はまさにハンセン病患者に捧げた一生ね。博士の生まれた円周寺は、おじい様の啓導さんの時代からハンセン病とのかかわりが大変大きかったの。

円周寺の僧侶であるとともに医者であった啓導さんのところには、ハンセン病の患者が治療のために訪れていたそうよ。中には遠くから来る人もいて円周寺に泊まって治療をしたの。

なぜ、ハンセン病患者が遠くから来たの？



円周寺は甚目寺観音の近くにあるでしょ、神社やお寺には行き場所のないハンセン病患者が多く寝起きしていたといわれているわ。働くこともできないのでおまいりに来る人に食べ物ももらっていたのね。そんなハンセン病患者が体の調子が悪くなった時、啓導さんに助けを求めたの。啓導さんは少しもいやな顔をせず、治療し、食べ物もあげたそうよ。



そうか！小笠原博士はそんなおじいさんの様子を見ていたんだ。きっと！



円周寺の境内にあった小屋で、ハンセン病患者が寝泊りし、時には本堂で村の人と囲碁を打っていたそうよ。ハンセン病にかかれば家族からも見放され、家族のもとに帰れなかった人も多くいた時代に、普通の人と同じように接した啓導さんだったから、遠くからでも治療に来たのね。

普通の人と同じように接していたのか。



博士の心のなかにハンセン病は世間が思っているほどおそろしい病気じゃないと言う考えが自然と身についたと思うの。差別や偏見の強い時代に、啓導さんがハンセン病患者に親切にするのは、医者だったからだけでは説明できないと思うの。



## 宗教の影響



啓導さんがハンセン病患者に親切にした理由が医者のほかにあるの？

僧侶で医者をしていた啓導さんの人としての一番大切な部分は、仏教の教えのひとつである「慈悲の心」じゃないかなと思うの。







慈悲の心？

仏教は昔インドのお釈迦様が始めた宗教で、日本人の多くは仏教を信仰しているの。「慈悲の心」をわかりやすく言えば、全ての命を大切にすることよ。ハンセン病の患者だから健康な人より命が軽いつてことじゃないと、言い換えることもできるわ。博士も小さいときから仏教の修行をし、おじい様と同じ僧侶で医者だったから、博士の根底に流れているのはおじい様ゆずりの慈悲の心であると思うの。

小笠原博士が医学だけを勉強しただけなら、研究熱心な優秀な医者で終わって、ハンセン病の歴史に名を残す偉大な医者にはならなかったかもしれないけれど、医者である前に僧侶であったから、小さいものや、弱いものの立場や気持ちが理解できたんじゃないかな。



## らいは不治でない～ハンセン病論争～



博士は以前からハンセン病は治らない病気じゃないし、遺伝病じゃない。伝染病だけど結核に比べればうつりにくい病気と主張され、国の強制隔離政策に強く反対されていたの。だけど、ほとんどの医者は博士の主張を正しいと認めず、ついに昭和16年「第15回日本らい学会」が開かれ、日本中の医者が博士を攻撃したの。

らい学会ってなに？



日本中の学者や医者が集まってハンセン病について考える会のことで、当時は国の強制隔離を推進していたの。博士は隔離政策には反対でしょ！だから学会は博士の意見を変えさせようとしたの。でも回りからどんな圧力がかかっても博士は自分の考えを変えることはなかったから、それができないとわかると博士に「お前はらいを伝染病と認めるのか、認めないのか」とつめよったのよ。

博士はどうしたの？



博士はハンセン病が伝染病じゃないとは一言も言っていないの。伝染病であることは認めているから、「認める。」って答えて、それに続けて「でも、チフスや赤痢のように人から人に爆発的にうつらない。」と言っただけだけど、そこはかき消されてしまったの。学会にとって都合のいいところしか聞き入れなかったのね。翌日の新聞には「小笠原説敗れる」との見出しの記事がのったそうよ。

博士の考えは間違っていたってこと？



世間の人々は新聞に書いてあることは正しいと思うから、ハンセン病はやっぱりおそろしい病気だと思ったでしょうね。博士の考えの正しさを多くの人々が理解するのはずーっと後のことね。

しゅ もく かね かね おと  
**撞木と鐘と鐘の音**



突然ですが手をたたいてください。

はい。(手をたたく)



パチンといい音がしましたね。ところで、今した音は右手から出た音ですかそれとも左手から出た音ですか。

エー！そんなのわからない。



右手と左手がぶつかった時にパチンと音が出たのよ。右手だけでは音はしない。もちろん左手だけでもね。じゃ、お寺にある鐘はどうか？

鐘って大晦日につく除夜の鐘？



鐘

撞木



そう！お寺には大きな鐘があって、横に鐘をつく木が吊り下がっていて、その木を撞木と言うのよ。博士はそれをハンセン病に例えて、鐘が体質、撞木がらい菌、音がハンセン病の様々な症状とすると、鐘を突く棒だけでは音はならない。博士はお医者さんでもあり、お坊さんでもあったから、国や他の学者が「らい菌」ばかりに注目していた事をこんな例えでハンセン病の発病について説明したのよ。とってもわかりやすいでしょ！

くう らん  
**空欄のカルテ**



博士は大学を卒業してそのまま大学病院の医者になり、ハンセン病の診療をされたの。診察はとてみていねいで患者一人に1時間もかけるほどだったそうよ。お医者様が患者を診察した時に病名や症状を記入する物をカルテと言うのよ。ところが昭和6年以後、博士が診察したハンセン病患者の病名欄が空欄だったり、別の病気の名前が書かれていたの。



なぜ博士はそんなことをしたの？







博士の評判を聞いて多くのハンセン病患者が診察に来たけれど、昭和6年に「らい予防法」が改正され、ハンセン病患者の強制隔離が始まってからは、カルテの病名欄にハンセン病と記入すると、その医者は警察にそのことを報告しなければならないの。どこの誰がハンセン病にかかっていることを報告することは、その人が強制隔離されることを意味し、博士は、それを避ける為に病名の欄を空欄又は、別の病名を記入したの。今でも京都大学には、多くの空欄のカルテが保管されているそうよ。このおかげで患者は強制隔離を逃れることが出来ただけど、違法すれすれの行為だったわけ。

そうか。わざと空欄にしたわけね。



目の前の患者を強制隔離から救うために、医者としてできる最大限の抵抗を国に対してしたのね。そのことで自分に危害が及ぶかもしれないことも覚悟のうえだったと思うわ。

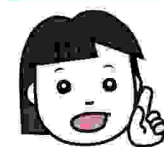
危害が及ぶかもしれないって、  
どんなこと？



故意にハンセン病患者の患者を報告しないことは、強制隔離を推し進めていた国の方針に逆らうことだったの。国にとって好ましくない人間を力で押さえつけようとしたこともあったから、博士の身に何も無いとは言いきれないと思うの。ハンセン病患者は国にとって役に立たない人と思われていたから、強制隔離によって新たに患者になる人の数を減らそうとしたのね。



## 国って何だろ？



お母さん、今までの説明の中で国という言葉がたくさん出てきたけれど、国っていったい何なの？

とても難しい質問ね。国とはいったい何をさしているのかな。勿論、日本国であることに違いないけど、たとえばある時は、偉い政治家や偉い役人だったり、法律だったりすると思うの。でも一番おおもとにあるのは日本人の中の小笠原博士のような一部のを除いたほとんどの人がハンセン病は怖い、うつる、親から子に遺伝する、治らない、顔や手足が変形する、といったことを信じてしまったからなのね。これは学者や役人がその様に言っていたからでもあるし、また、ハンセン病患者の中にはその様な人がいたのかも知れない。普通にしていれらうつらないのだけれどね。つまり、お母さんも含めて、その偉い役人や法律の後ろにはハンセン病患者だから隔離されてもしょうがないと思って見過ごした多くの人があったことを考えなければならないと思うの。



見て見ぬふりをしていた人がいたってこと？

それは人権という視点に立つとよくないことなのだけれどね。



でも、ノノンはまだ生まれてなかったんで関係ないでしょ？

スイッチをひねれば電気がつき、蛇口をひねれば水が出る。これは先人の努力のおかげでしょ。いいものだけ受け継いでいやなものはいらぬというの虫がよくない。先人の失敗をしっかりと勉強して、未来につなげるのがノンの役目だと思わない?



関係ないなんて言っちゃいけなかったね。反省します。

素直なところがノンの良いところね。母さんも、もっとも勉強するわ。



## おわりに

小笠原登博士は国が行ったハンセン病の強制隔離にきちんと反対し、反論したたった一人の人でした。どんなに反対されても自分の考えを曲げることはありませんでした。

学生服のボタンを取り替えただけと思われる質素な服装、丁寧な診察と親切な説明をどんな患者にも分け隔てなく行いました。奄美大島の療養所で園医をされているとき、ある入所者が「どうせこの病気は治らないんだからどうなってもいい」という気持ちになったとき、その患者に窓の外の松の老木を指差して「あの松の左の枝は枯れている。その枝はもとに戻らないが木全体は青々と茂っているだろう。木全体は病んでない。あなたの後遺症はもとに戻らないかもしれないが、病気そのものは必ず治る。」とはげました。

患者は病気で苦しんでいるから、無用の不安を与えてはいけなと患者の目の前での消毒をしませんでした。看護師にもそのように指導しました。病室に入るときは「小笠原です。入ってもよろしいか」と入り口で声をかけました。博士は患者であれ、誰であれ、偉い人も、そうでない人も、相手を対等な人格として尊重しました。診察の時も太いじゅずを手巻きつけておられた博士は、病気の説明よりお坊さんとしての話のほうが多かったようです。

ハンセン病患者やその家族が受けた大変な人権侵害を考えると、とても暗い気持ちになりますが、そんな時代に小笠原博士のように弱い患者の立場に立って、堂々と意見を主張し、それが通らぬとなると、医者としての最大限の力を利用して目の前の患者を強制隔離から救った人がいたことが、闇夜を照らす一筋の光のようで、ほっとした気持ちになります。

小笠原博士が生きていた間、その正しさを誰も認めませんでした。ずーっと後になって、小笠原博士の弟子大谷博士の努力によってらい予防法はようやく廃止され、国が過ちを認め、ハンセン病患者に謝罪しました。しかしそれで、全てが解決したわけではありません。二度と同じ間違いを起こさないためには正しい知識を持つことは当然ですが、小笠原博士のように相手の立場に立って考えることのできる人になることが重要なのではないのでしょうか。



## 小笠原登博士年表

- 1888(明治21年) 愛知県甚目寺村円周寺にて誕生  
1895(明治28年) 甚目寺尋常小学校入学  
1911(明治44年) 京都帝国大学医科大学医学科入学  
1915(大正4年) 京都帝国大学医科大学医学科卒業  
1926(大正15年) 京都帝国大学医学部附属病院でハンセン病の診療を担当  
1948(昭和23年) 京都大学退職 国立豊橋病院勤務  
1955(昭和30年) 国立豊橋病院退職  
1957(昭和32年) 国立らい療養所奄美和光園勤務  
1966(昭和41年) 国立らい療養所奄美和光園退職  
1970(昭和45年) 愛知県甚目寺町円周寺にて死去  
2001(平成13年) 東京弁護士会人権賞を受ける  
2007(平成19年) 甚目寺町名誉町民第2号の称号を受ける

## 参考文献

- 「ハンセン病・資料館・小笠原登」  
大谷 藤 郎 財団法人 藤楓協会 (1993年発行)
- 「甚目寺むかしばなし」 甚目寺町教育委員会 (1998年3月20日発行)
- ブックレットNO.10「小笠原登 ハンセン病強制隔離に抗した生涯」  
熊谷 宗 恵 真宗大谷派宗務所出版部 (2003年11月10日発行)

## 監修

国立ハンセン病資料館 名誉館長 大谷 藤 郎

文部科学省委託事業  
平成20年度 人権教育推進のための調査研究事業

## ハンセン病と小笠原登博士

平成21年2月20日 初版 第1刷発行

編著・発行 愛知県人権ファンクション委員会  
甚目寺町人権教育調査研究委員会  
愛知県海部郡甚目寺町大字甚目寺字二伴田65番地  
TEL 052-444-1621 FAX 052-443-9778

挿 絵 立松 泰 博  
印刷・製本 株式会社 プリテックコーポレーション